

要な支援課題であり、多様な集団の場を提供しながら、仕事とおりあいをつけ、利用者が老いとどう向き合っていくかを支援していく職員の役割が大きいと話されていました。また、障がいのある人が年齢を重ね、その時々課題を乗り越えながら人生の最期を迎えるまで、継続的に支援を行った経験を有する福祉施設や職員はまだまだ少ない。高齢期にふさわしい障がい者の新たな生活作りを担う職員の専門性の確立と専門家集団の育成、制度的な基盤設備の改善と拡充が求められています。

午後のシンポジウムでは、親の立場、訪問看護事業所の立場、障害者支援施設の立場から3名の提言がありました。

私が印象に残ったのは、親の立場で登壇された奈良県手をつなぐ育成会の元理事長の野口 幸子 氏の話で、息子さんが椎間板ヘルニアで緊急入院された時のことを話されました。

昨年の夏、台風で天候が荒れている中、受診したところ椎間板ヘルニアと診断され、即入院となりました。入院の翌日、はじめに病院で聞かれたことが「尿が出たか」ということでした。トイレに行ったかどうかではなく尿が出たかの確認が大事だと病院側から言われたそうです。手術は無事成功したのですが、片足にまひ、自力の排尿が出来なくなってしまうようで、転院まで自力排尿訓練、歩行訓練が始まりました。痛みを自分から発する事が無かったので、我慢強い患者、家族の支援が強い患者と病院側に印象を持たれたそうです。約一か月後に総合病院に転院し、転院後は一ヵ月半に及ぶリハビリで、杖歩行、自己導尿が出来るようになったそうです。退院後はヘルパーと訪問看護が一緒になっている事業所を探していたが見つからず、医療行為がヘルパーに出来ないので、将来に向け共通認識・理解の連携を求めてみたが難かったそうです。また、月1回の訪問看護も慣れたところで担当の人が家庭の事情で退職されたことがあり、仕方がない事ではありますが、永続的に同じ人に来てもらう難しさについても話されていました。

最後に「ある日突然、わが身に」だとすれば、高齢者、障がい者、児童の支援においても、切れ目ない医療と介護を視点に地域共生社会の福祉改革の必要性を感じますと話されていました。

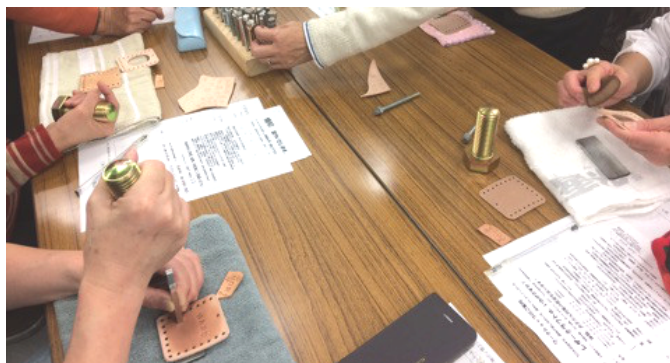
今回の話を聞き「いざ」という時のために(特にシンポジウムの野口氏の中では、緊急搬送後に次々と症状が判明する中で冷静・的確に連携先を判断するため)日頃から相談機関と連携する必要性を感じました。

## 会員交流会(レザークラフト)を開催しました

昨年より年に1回いつもの勉強会と趣きを替え、会員の皆様で手作り作品の制作を楽しんでいます。今年度は12月15日に、天王寺区空堀にある革細工の工房クラフトハウス510の代表であります後藤様にご指導頂きながらレザークラフトに挑戦しました。

ヌメ革に自分で考えたデザインで刻印を押し、かがり縫いで周囲に革ひもを通すとお洒落なネームホルダーが出来上がります。初めに練習用の革で印の試し打ちをしましたが、力加減が難しく、薄かったり濃かったり・・・やり直しが利かないことに緊張しました。アルファベットやふくろうやカエル、葉っぱや花など沢山の印を持って来て下さったので、「これはどうかしら」「誰かAの印使ってますか?」とワイワイおしゃべりしながら、皆様思い思いのデザインで打ち始め、最後のひもの始末を先生にして頂くとネームホルダーが完成しました。出来上がった作品を見せて頂くと、個性豊かな素敵なものばかりで、始める前は子どもさん用にしようとおっしゃっていた方が「上手く出来たから自分のにするわ」に変わっていたりしました。まだ白いヌメ革ですが、日光に当たるとどんどん茶色になっていくそうです。

クラフトハウス510様の工房ではネームホルダーの他に財布やメガネケース作りも体験することが出来ます。今回は障がいのあるご本人様にも参加して頂き、短い時間でしたが皆様と「ものづくり」の楽しさを実感することが出来ました。



## きずな会でクリスマス会を行いました

メープル 管理者 石橋 孝治

きずな会は港区在住のご本人たちが立ち上げた、ご本人たちが運営するご本人たちの会です。活動内容としては、行事などを皆で企画して楽しむという事が主になります。ご本人一人一人が主体的に楽しみ、時にはそれぞれの役割を果たすなどしながら、その中で仲間ができたり、経験が増えたりして人生の幅が広がっていく活動ではないかと感じております。